

# 1 まえがき

2025年(令和7年)に戦後80年を迎え、戦争体験や教訓の風化が懸念される中で、沖縄県内の多くの戦争遺跡は、戦争の不条理さ、残酷さ、醜悪さを知り、平和の尊さを学ぶ平和教育の場である一方、開発や劣化などで原形をとどめられなくなっていることから、その保存・公開が求められています。

また、戦争体験者の証言を直に聞くことが困難となりつつあることから、体験者の証言を収集・記録した資料や史実に基づく研究成果とともに、「物言わぬ語り部」である戦争遺跡の活用が求められています。

とりわけ、沖縄戦の軍事的中枢施設であった第32軍司令部壕は、住民を巻き込み熾烈な戦闘が展開された沖縄戦の実相を知る上で極めて貴重な戦争遺跡であることから、その活用を行うことで、多くの人々の考えるきっかけとなり、沖縄戦の歴史的教訓を次世代へ正確に継承していくことに繋がります。

2025年(令和7年)3月策定の「第32軍司令部壕保存・公開基本計画」では、同壕を、沖縄戦の実相を伝えることができる平和教育・学習の場として利活用するとともに、見学者に同壕を解説するための語り部やガイド等の育成に向け、収集した資料や証言を参考にしたガイドテキストの作成に取り組むこととしています。

策定した計画を踏まえ、この度、沖縄県の公式な刊行物である『沖縄県史』や、本県でこれまでに収集した資料等を活用した「第32軍司令部壕ガイドテキスト」を作成しました。

本ガイドテキストでは、沖縄戦の経過、第32軍司令部の展開、第32軍司令部壕の構築過程や構造、壕の各ポイントについて解説するとともに、同壕周辺の戦争遺跡や沖縄県の取り組みを掲載しました。

また別冊として、ガイドが現場で使用できる、写真資料編も併せて作成しました。

本ガイドテキストを通して、第32軍司令部壕を対象としたガイドの解説内容が更に充実し、より正確に沖縄戦の実相を伝え、継承していくことに結び付くことを期待します。

2026年(令和8年)3月  
沖縄県知事公室平和・地域外交推進課

# 2 沖縄戦と第32軍

## 2.1 沖縄戦の経過

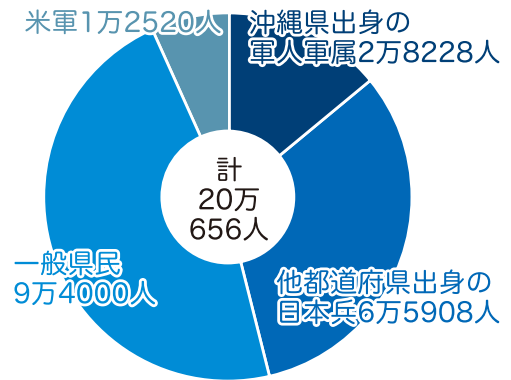
沖縄戦は、アジア太平洋戦争末期の1945年（昭和20年）に日米両軍が沖縄で住民を巻き込んで繰り広げた地上戦です。このとき沖縄戦を指揮したのが第32軍司令部でした。住民を巻き込んだ地上戦は沖縄以外にもありましたが、軍人よりも一般住民の犠牲者が多いというのが沖縄戦の特徴でした。また、日本兵による避難壕追い出しや食糧強奪、スパイ嫌疑による虐殺、「集団自決（強制集団死）」などもおこりました。

アジア太平洋戦争において沖縄は、1943年（昭和18年）半ばまでは、日本陸海軍にとって軍事戦略上はさほど重要な拠点ではありませんでした。しかし、ソロモン諸島・東部ニューギニア方面での米軍の反撃が激しくなり、同年9月30日に「絶対国防圏」が設定されてからは、第一線陣地となったマリアナ諸島（サイパン・グアム・テニアン）やパラオ諸島を背後から支援するための第二線陣地（航空中継基地）としての役割を担うこととなりました。

1944年（昭和19年）7月から8月に中部太平洋マリアナ諸島が陥落すると沖縄は第一線陣地となり、第32軍の陸軍部隊が次々と送り込まれました。このとき新しく第32軍司令官として着任したのが牛島満中将でした。その後、決戦の場と考えられていたレイテ決戦が断念されたことで大本営の関心は本土決戦に向き、沖縄は本土決戦のための時間稼ぎの場として位置づけられるようになります。1944年（昭和19年）8月には疎開船「対馬丸」がアメリカの潜水艦により撃沈され、疎開学童をはじめとした住民に戦争の被害が及びました。

10月10日には、十・十空襲（南西諸島空襲）で南西諸島が初めて本格的な戦争被害を受けました。南西諸島はそれ以前にはほとんど空襲されたことがなく、沖大東島が9月27日、および10月3日に大型機各一機による銃撃を受けた程度でした。<sup>1</sup> この十・十空襲で沖縄住民は米軍の攻撃のすさまじさを実感しました。同日午前7時から午後4時近くまで、第一次から第五次にわたり空襲が行われました。攻撃地域は沖縄島だけでなく奄美群島・大東諸島・宮古・八重山にまで及びました。本来の攻撃目標は飛行場や船舶、港湾施設、軍事施設で

### 沖縄戦の戦没者



（注）沖縄県による推計値。英国兵や朝鮮半島・台湾出身者は含まず。

出典：「沖縄の援護のあゆみ」1996年（平成8年）  
沖縄県生活福祉部  
〔1957年（昭和32年）頃に琉球政府が推計〕



▲十・十空襲〔1944年（昭和19年）10月10日〕  
／出典：沖縄県公文書館

## 2. 沖縄戦と第32軍

あり、民間地区は対象になっていませんでしたが、第四次・第五次攻撃で那覇市の民間地区が集中攻撃を受けました。

1945年(昭和20年)3月23日、米軍は南西諸島全域を空襲し、24日には艦砲射撃が始まりました。3月26日早朝には、米軍の沖縄攻略作戦として第77歩兵師団による慶良間諸島上陸が開始されました。米軍は沖縄島への上陸に先だち、戦闘用艦艇と輸送船が風波と潜水艦攻撃を避けて安全に投錨、停泊できる場所を確保しようとしていました。一方で、米軍がいきなり慶良間諸島に来る可能性は少ないと判断していた第32軍にとっては意表をつかれた形となりました。結局、慶良間諸島の主要な島々は3月29日までに米軍に占領され、ここを基地としていた特攻

艇(海上挺進戦隊)は28日に少数が出撃してLCI(歩兵揚陸艇)一隻に損傷を与えただけで、残りは陸上で全滅しました。

4月1日には、米軍は沖縄島西海岸(現在の読谷村・嘉手納町・北谷町の海岸)に上陸しました。米軍のアイスバーグ作戦(沖縄攻略作戦)では総兵力は約55万人でしたが、対する日本軍の兵力はおよそ10万人、しかもその中には防衛隊や学徒隊、義勇隊など現地召集の補助兵力を多く含んでいました。激しい戦闘が展開され5月に入り米軍が首里に迫ると、第32軍司令部は南部の喜屋武半島への撤退を決め、なおも戦争を続けました。

南部には地元住民のほかにも戦火に追われて避難してきた人びとがいました。「鉄の暴風」と称される米軍の猛爆撃にさらされ、隠れた壕も攻撃の対象となり、住民と日本軍が混在する中で多くの犠牲を生むこととなります。沖縄戦では県民の4人に1人が犠牲になり、民間人の死者は軍人を上回りました。



▲占領した飛行場を守るための、米軍の凄まじい対空砲火 [1945年(昭和20年)4月16日]  
／出典:那覇市歴史博物館



▲捕虜になった少年兵。左が18歳、右が20歳と米軍の説明にはあるが、実際には13~18歳の中学生が多かった。 [1945年(昭和20年)6月17日]  
／出典:沖縄県公文書館



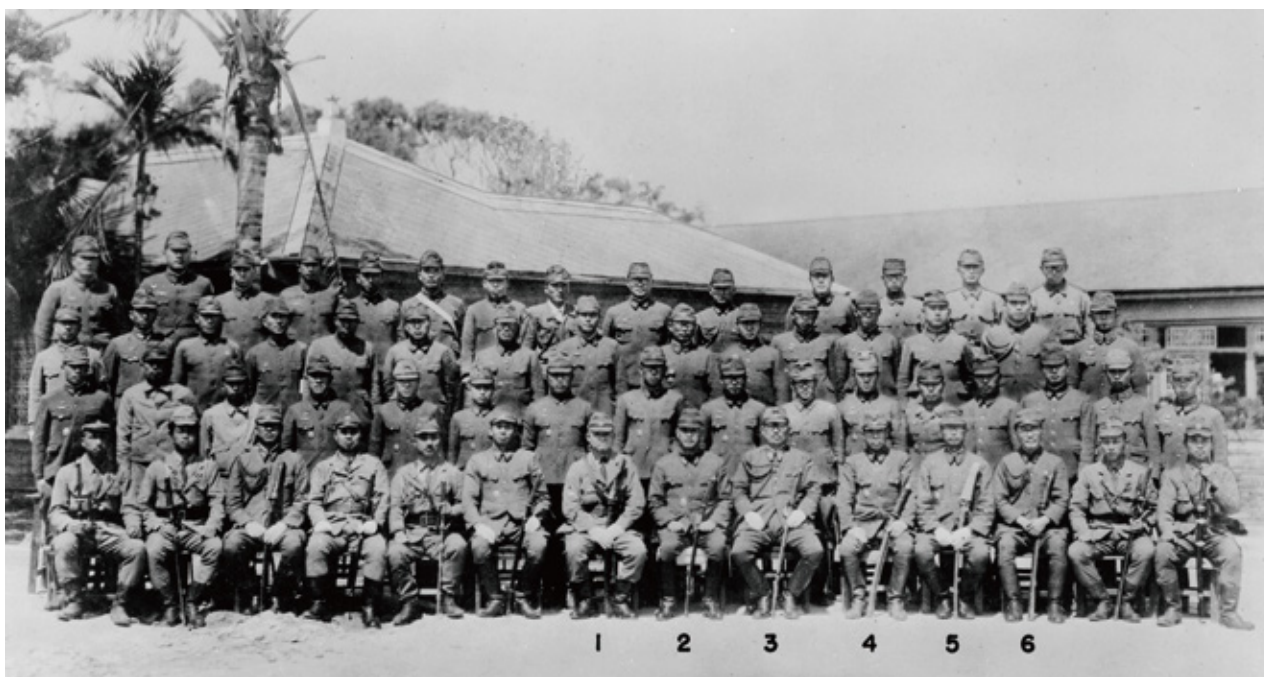
◀壕内から救出される母と子  
／出典:沖縄県公文書館

## 2.2 沖縄に配備された第32軍

第32軍（通称号・「球」）は、1944年（昭和19年）3月22日に編成された、奄美群島から先島諸島までを作戦範囲とする部隊です。編成当時の人事は、司令官・渡邊正夫中将、参謀長・北川潔水少将、高級参謀・八原博通大佐が軍司令部の中心でした。

第32軍はもともと航空作戦準備のための第二線兵団で、当初課せられた任務は航空決戦の準備と飛行場の確保というものでした。そのため沖縄県の一般住民を動員して飛行場の建設を進めましたが、レイテ決戦のための戦力抽出などの事情により、次第に当初の航空決戦構想とは異なる地上持久戦を志向するようになります。7月以降はマリアナ失陥にともなって急速に増強され、「連絡圏域」（台湾・沖縄方面）における「決戦」を担うべき第一線兵団となりました。第一線兵団と位置づけられた後は、北川参謀長が7月に、渡邊司令官が8月にそれぞれ転出し、司令官・牛島満中将、参謀長・長勇少将が着任しました。最終的に、牛島司令官、長参謀長、八原高級参謀、木村正治後方参謀（中佐）、釜井耕輝航空参謀（中佐）（のち神直道少佐に交代）らがその後の沖縄戦準備・遂行にあたった第32軍の最高幹部となりました。

第32軍では、司令官が最高指揮権をもち、参謀が作戦の計画・指導を行っていました。各部隊からの戦闘報告を受け、戦況に応じた意思決定を軍事命令として指揮下の各兵団・各部隊へ伝達し、さらに大本営などの上位組織に対して戦況を報告するなど、第32軍司令部は文字通り「軍の頭脳」として機能していました。



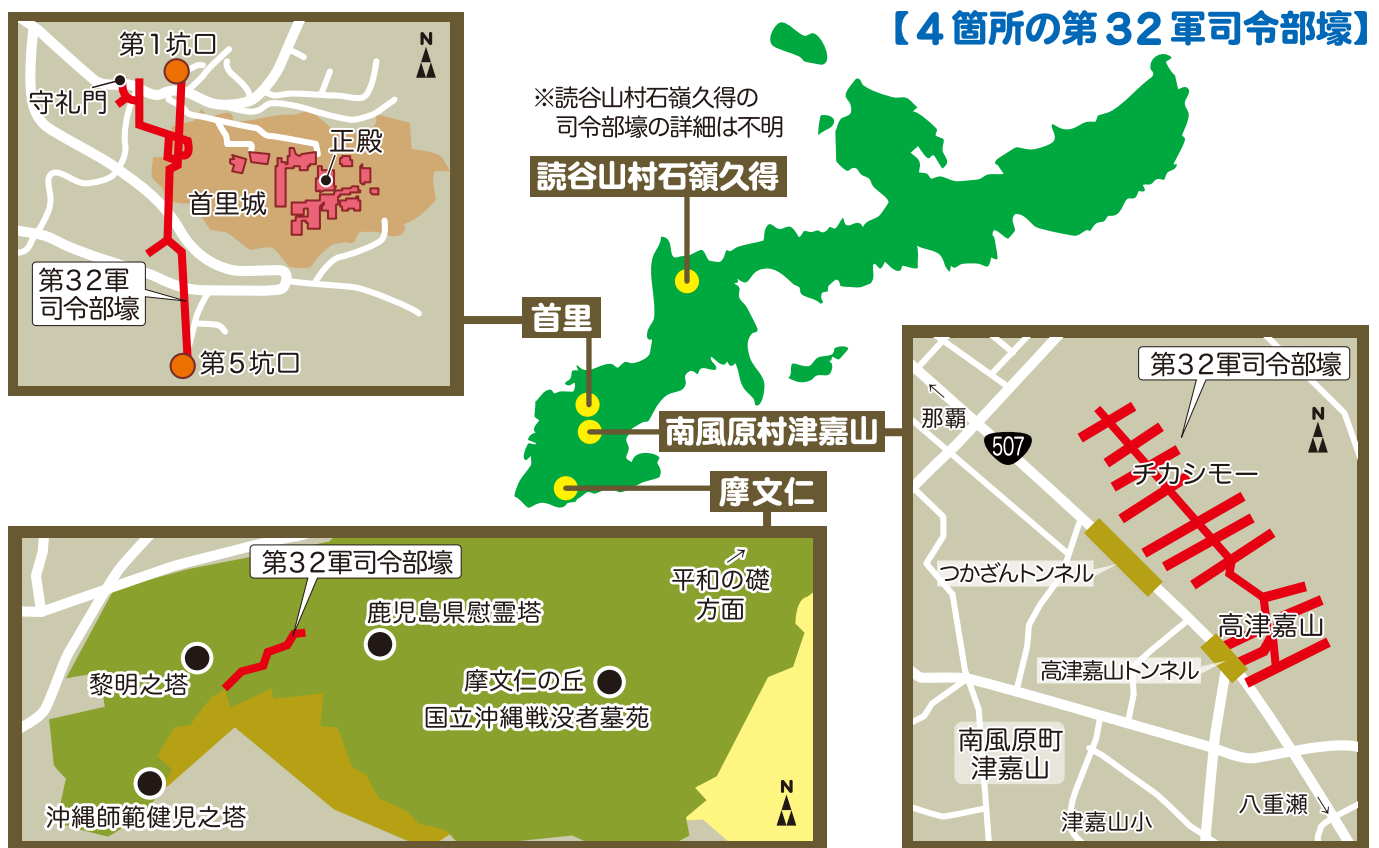
▲日本軍第32軍首脳部の集合写真 ①大田実海軍沖縄方面根拠地隊司令官、②牛島満第32軍司令官、③長勇第32軍参謀長、④金山均歩兵第89連隊長、⑤北郷格郎歩兵第32連隊長、⑥八原博通高級参謀 [1945年（昭和20年）2月] / 出典：沖縄県公文書館

### 2.3 第32軍司令部壕

第32軍は兵力の減少と決戦構想の転換により、しばしば陣地変換を行いました。例えば、第32軍司令部壕もその一つです。

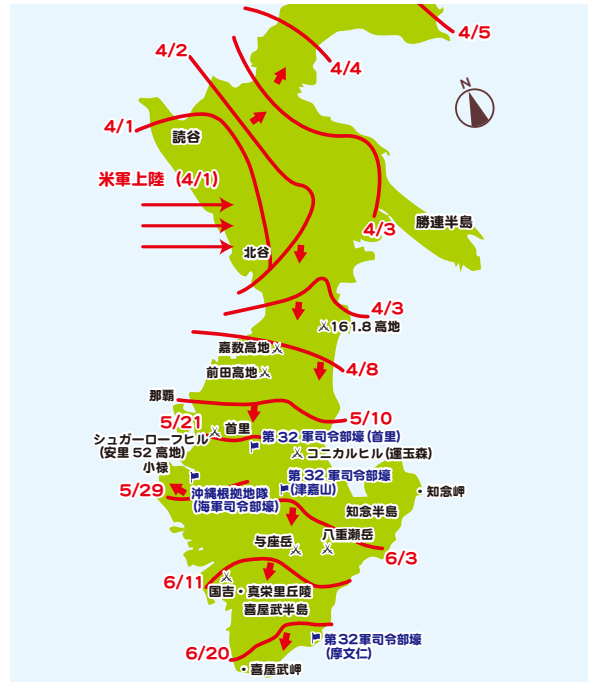
第32軍は当初、真和志村（現在の那覇市）松川の蚕糸試験場に司令部を設置し、読谷山村（現在の読谷村）石嶺久得と南風原村（現在の南風原町）津嘉山の2か所で司令部壕の構築を進めました。しかし1944年（昭和19年）10月10日の米軍による十・十空襲（南西諸島空襲）以降、艦砲射撃や空襲に耐えられる強固な壕への移転が検討されます。その結果、新たに首里城の地下に司令部壕を構築することが決定されました。なお津嘉山の壕には、司令部のうち経理部など軍の後方支援をする部局が配備されました。

移転先である首里城のある丘は標高が高く、周囲の地形をよく見渡せ、かつ琉球石灰岩の硬い岩盤からなるため、移転先の条件に合っていました。構築作業は1944年（昭和19年）12月9日に開始され、第2野戦築城隊を中心に、沖縄師範学校や県立第一中学校の生徒らによって行われました。1945年3月23日には第32軍司令部壕の本格的な使用が始まります。しかしその後、大本營の作戦介入による混乱もあり、第32軍は持久戦に徹することができないままに戦力を消耗していくこととなります。



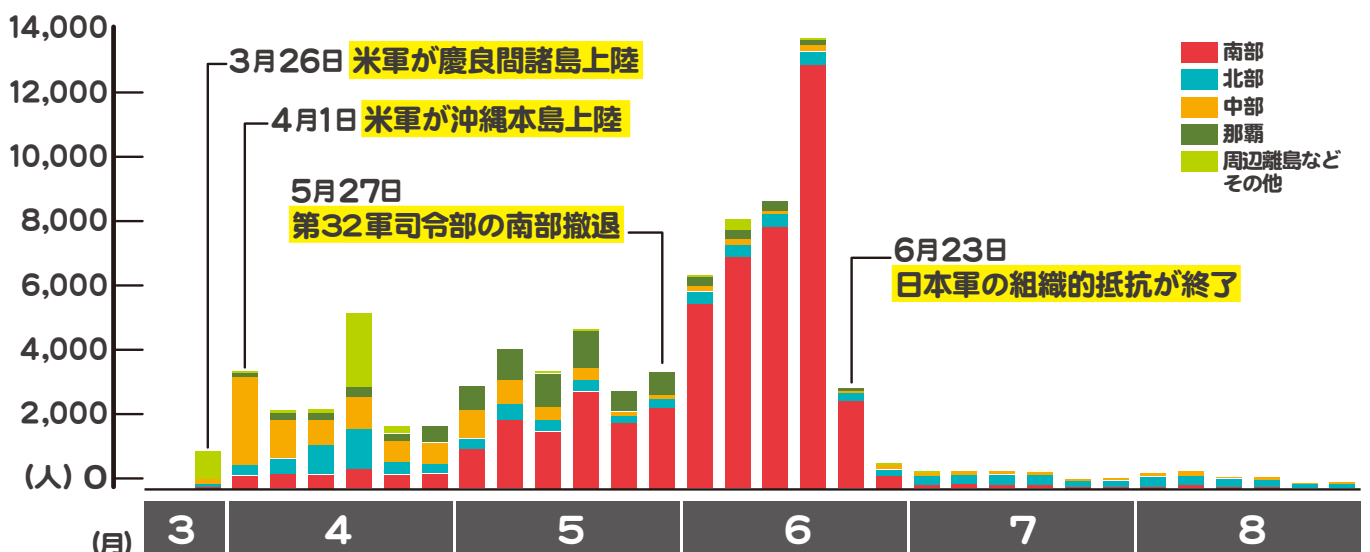
## 2.4 南部撤退の決定

1945年（昭和20年）5月4日、日本軍は米軍に総攻撃をかけますが苦戦し、翌日には攻撃を中止します。この時点で司令部の置かれた首里の防衛は困難となっていました。壕内では今後の作戦として、①首里決戦案、②知念半島撤退案、③喜屋武半島撤退案の3つが議論されます。そして5月22日、本土防衛のための時間稼ぎ（持久戦）を重視した司令部は、喜屋武半島撤退を決定しました。その理由としては、交通網上もっとも撤退が容易であったことに加え、第24師団の旧陣地があり軍需品が集積されていたこと、自然洞窟（ガマ）が多数存在したことなどがあげられます<sup>2</sup>。



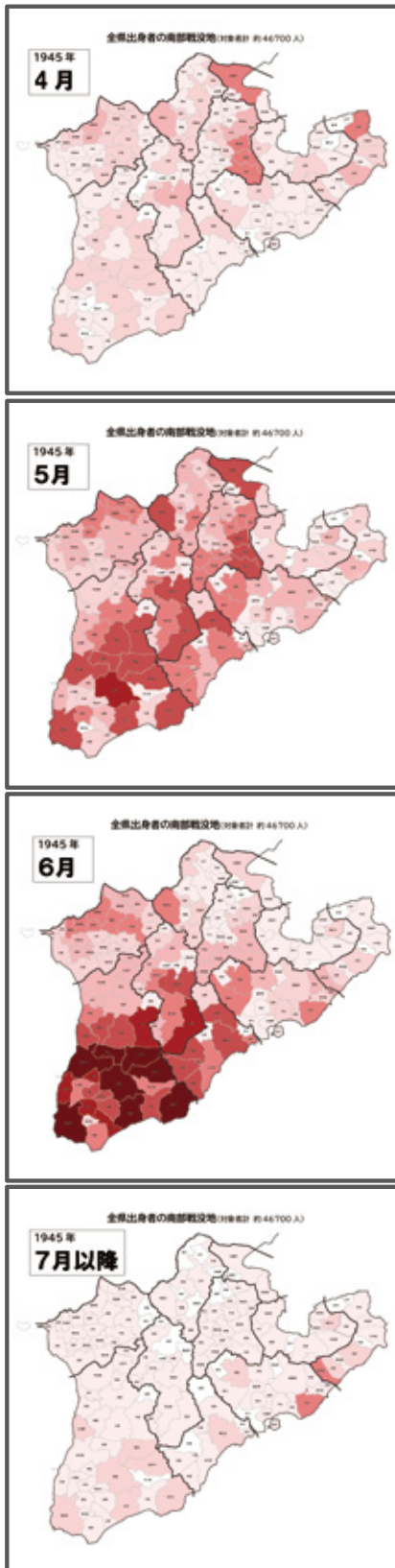
あわせて定められた「新作戰計画」にもとづいて残された兵力を南部に再配置しましたが、もはや米軍と戦えるだけの戦力は残っていませんでした。こうして司令部は5月27日の夜、豪雨の中で撤退し、南風原村津嘉山を経て、30日には最後の司令部壕となる摩文仁の壕へとたどり着きました。およそ4ヶ月かけて構築された司令部壕はたった2ヶ月で放棄されることとなりました。

## 1945年3月26日～8月末までの沖縄県出身戦没者数の推移



▲1945年3月26日-8月末までのおおよそ5日ごとの沖縄県出身の戦没者数の推移／出典：平和の礎の刻銘者データより作成  
同時期に沖縄島および周辺島嶼で亡くなった沖縄県出身の戦没者のうち、戦没日時・戦没場所がわかる約8万5100人を対象として算出した。亡くなった時期や場所が不明となっている戦没者も一定数いるため実態を反映していない可能性もあるが、5月27日の南部撤退以降に南部での戦没者数が増加していることがわかる。

## 2.5 司令部の南部撤退によりもたらされたもの



第32軍は南部撤退の際に住民の非戦闘地域への避難を徹底しませんでした。これにより、南部では極端な軍民混在の状態が生まれ、米軍の無差別的な掃討戦に巻き込まれ住民の犠牲者は一気に増えました。また、日本兵による避難豪追い出しや食糧強奪、スパイ嫌疑による虐殺などもおこりました。

一般住民の避難地区に軍主力が撤退するというこの決定こそが、軍人よりも一般住民の犠牲者が多いという沖縄戦の悲劇を生み出した最大の原因でした。このように、第32軍司令部壕は沖縄戦における戦闘を指揮しただけでなく、住民の犠牲を拡大させた南部撤退の決定がなされた重要な場所となりました。

### ◀沖縄県出身者の南部戦没地

出典：北上田源「平和の礎の戦没者情報から読み解く沖縄戦の実相(2)」(2026)

南部の字単位での戦没地の傾向を可視化した図。対象としているのは、南部で亡くなった沖縄県出身の戦没者のうち、亡くなった場所が字単位で、亡くなった時期が時期が月単位でわかっている約46,700人。1945年(昭和20年)4～6月の単月と、7月以降の各字での戦没者数を地図上に色分けして示している。濃いほどその字での戦没者が多いことを示す。

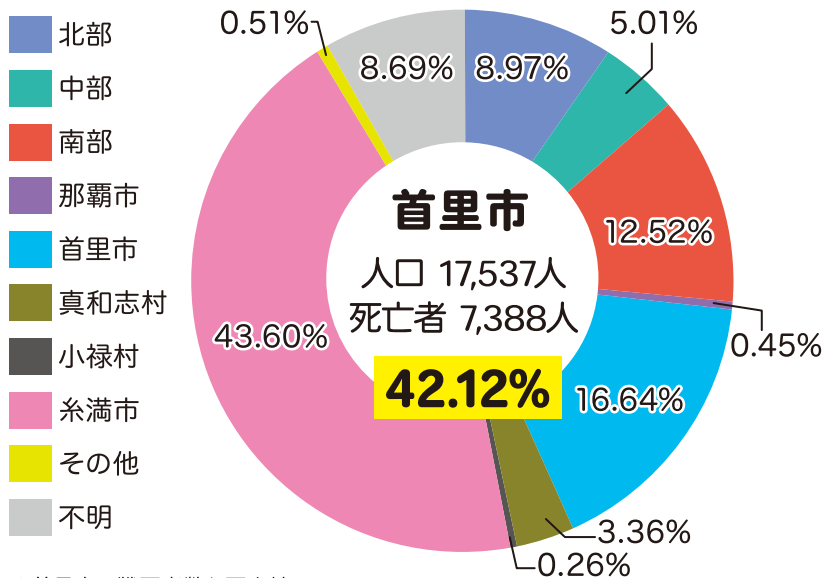
4～6月にかけて戦没者が多くなる字が南部の中でもより南の方に徐々に移り替わっていく様子がわかる。加えて、5月以降に南部での戦没者が大きく増加していることが示されている。

●糸満市域で6月に戦没者数が1000人を超えるのは新垣、国吉、真栄里、真栄平、真壁、摩文仁、米須、喜屋武である。糸満市の中でも南部に集中しているのは間違いはないが、それでも最南端に集中しているわけではないことは特徴的である。

●糸満市域以外で特徴的な字として、与那原町与那原、南風原町津嘉山、大里村大城(現在の南城市大里大城、真境名、稲福など)が挙げられる。これらの字では、4月～6月まで全時期を通じて一定数の人が亡くなっている。詳細はわからないが、交通の要所となり多くの人がこれらの字を通過したのではないかと考えられる。

7月以降の戦没者が最も多くなるのは百名(玉城)と志喜屋(知念)であり、これは収容所が設置されたためであると考えられる。

## 2.6 首里の戦争被害



▲首里市の戦死者数と死亡地

※戦死者の数は、「平和の礎」刻銘者数を元に、死亡地が沖縄県・不明、死亡年が1945年・不明にしぼって抽出した。死亡地が不明でも死亡番地や字区分等で県外とわかるものはのぞき、字区分等に市町村名が記されている場合は当該市町村に含めた。また1940年(昭和15年)国勢調査による人口を参照として用いた<sup>3</sup>。

第32軍司令部のある首里市(当時)は、1945年(昭和20年)3月末から米軍の猛烈な攻撃があり、多くの住民は早い時期に南部方面に避難しましたが、残っていた住民もいて戦闘に巻き込まれました。古都首里は一面焼け野原となり、首里城も焼失しました。残ったのは県立第一中学校の校舎と首里教会の残骸だけといわれています。

### 岩本兼一さん「県立二中最後の五年生島尻敗走の記」より抄録(当時18歳、県立第二中学校5年生)

3月25日、晴。慶良間沖の米機動部隊は朝から艦砲射撃を始めた。中頭や島尻の飛行場を狙っているのか、首里は割と平穏。  
 3月31日、晴。首里市内への砲撃日増しに激しくなる。家々も潰れて道にはみ出し、通行が不便になる。  
 4月1日、曇のち晴。朝から首里の軍の動きがあわただしくなる。夜に入ると、避難民が虎頭のワイタイから続々と抜けてくる。昨日までは国頭疎開のため宜野湾へいくのが多かったのに、たずねてみたら北谷あたりに敵軍が上陸、道路が封鎖されているとのこと。  
 4月3日、曇。敵部隊は普天間大山まで進出したという。この日の夕方、儀保通りを若い米兵が後ろ手にしばられたまま引立てられていった。宜野湾の手前で捕えた偵察兵らしい。  
 4月4日、曇。砲撃は南風原、小禄飛行場あたりから、宜野湾、浦添、西原に廻り、首里の周囲は全く戦場と化した。残り少ない首里の名家は火と煙に包まれ、一夜にして瓦礫の山になってしまった。  
 4月5日、曇。首里はいよいよ危険になったので、義兄の勤める与儀の農事試験場へ避難することにした。夕刻、儀保出発。山川の三差路はコンクリートの県道だが、もの見事に播鉢形の大穴で切断されていた。艦砲の威力を知ったのはこれが初めてだった。  
 4月20日、曇。朝、首里に出かける。首里金城町は前線とは反対の南向きにあるので、住民もそのまま屋敷におり、何といても司令部のお膝元なので活気がある。首里の外郭陣地で我が軍は一歩も退かず奮戦中とのこと。道理でこの辺りは安泰なのだと思いつつ家へ帰った。ところが与儀では大変なことがおきていた。昼すぎ義兄が艦載機の機関砲弾で負傷、左手の指四本を切断されていた。出血甚しく義兄は弱っていたが、薬品もなく、手当のほどこしようもなかった。  
 4月30日、小雨。首里司令部まで情報をききに行く。五月には総攻撃もあるらしい。先に志願した学徒隊は、一応軍服を着けて首里の町を駆け廻っている。小学校同期の女生徒も、高女は四年卒業だから、卒業と同時に軍需部あたりに志願して軍属になっていた。新しい軍袴、軍靴を履いて颯爽と歩く彼女らを見ると乞食同然の自分のぼろ制服姿が情けなかった。  
 5月1日、雲多く時々俄雨。首里周辺猛爆撃。  
 5月19日、曇。天久の高射砲陣地の辺りから安里、首里、虎頭まで直線に山が燃えている。白煙黒煙が入り交って天高く舞上がり、その煙の前後を観測機が数機出たり入ったりしている。夕刻、与儀の農事試験場官舎を出て県庁壕へ向う。義兄の墓を一目見たいという父の願いからである。繁多川到着は夜だった。

(出典: 那覇市企画部市史編集室『沖縄の慟哭 市民の戦時戦後体験記(1-戦時編)』p314-319)

## 2. 沖縄戦と第32軍

### 嘉手納宗徳さんの証言（当時31歳、久茂地小学校職員）

「ここにいても何だから首里に行こうかと話した。やはり考えが少し浅かったね。首里は最後の陣地だろうと思ったんです。首里が陥ちれば、もう沖縄全部占領される。それで首里と共に死んだ方がいいんじゃないかと考えたんです。山原行こうが、どこへ行こうが、最後に残るのは首里である。だから首里が落とされたら、沖縄は完全に占領だ。首里へ行こうと決めただね。」

（出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p743）

### 喜名祥介さんの証言（当時39歳、勤労働員係）

「首里の崎山の下に一週間ぐらいいましたですね。そこへ突然兵隊たちがきて、軍が使うから出ろとって入り込んできてですね。私らはやむを得んから、すぐには行かれんからちよっとの間だけ置かしてくれと頼んだんですが、兵隊がいうには、天長節を期してですね、反撃する作戦があるから、その時は跳ね返すからそれまで我慢してくれなとってね。結局は、私らをなだめているわけですね。そういわれて、こっちとしては、これはもういけないなと思いましたね。」

（出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p418-419）

### 宇良宗徳さんの証言（当時27歳、首里市役所職員）

「疎開命令が出たのは（昭和）二十年に入って間もなくだったと思います。戦争に入ってから間もなく新設された県の人口課（浦崎純課長）から各市町村に指示があって、首里は羽地村、今帰仁村に割り当てられました。（中略）首里に艦砲が打ちこまれたのは三月二十七、八日ごろだったと思います。その後四月二十四日に、首里住民に避難命令がでました。そのときは警察官が二人、軍命令を持って市長のところに来ました。市長は儀保の割といの壕におりました。市の職員とその家族も一緒に同じ壕に避難していたのです。避難命令で北部方面に疎開する人たちも大勢いましたが、首里に残っていた人も少なくなかったですね。そうですね、艦砲が打ちこまれてからはみんなちりぢりになり南部に退がる人も多かったように思います。」

（出典：那覇市企画部市史編集室『沖縄の慟哭 市民の戦時戦後体験記（1-戦時編）』p552-553）

### 長嶺孝子さんの証言（当時15歳、学生）

「（具志頭村の）後原の字から若い女性が三十名あまり出されて、首里の方まで、弾薬の箱を頭に乘せて運搬したんです。（中略）その後また、友軍から、首里は弾薬が不足しているから一人でも二人でもいいから弾薬を届けるようにという指令がくたってですね、私たちはまた行ったんです。そして途中で、砲弾の雨に逢っては引返してきて、また行って…くり返し五回も歩いて運搬したんですよ。」

（出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p821-822）

## 首里にあった慰霊塔「天衣無縫」



1945年（昭和20年）12月、住民の首里への移動が始まり、先遣隊による街の復興とともに遺骨は収集されました。1952年（昭和27年）4月の引揚援護庁復員局による「沖縄墓地一覧表」<sup>4</sup>には、首里市当蔵区の万松院の「天衣無縫ノ塔」に「5000以上」の遺骨が納められていることが記されています。

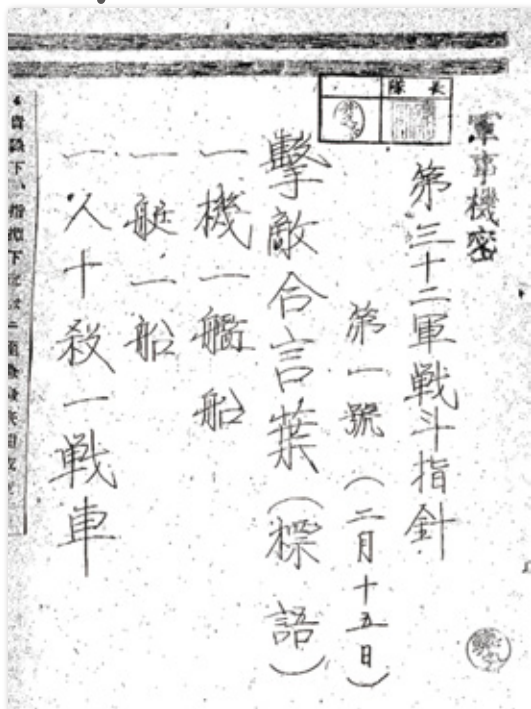
山城善三『慰霊塔案内』（1970年）によると、市民は戦後、累々と重なる「名も知れぬ軍人、軍属、老幼男女の白骨」を集め「お茶屋御殿に仮納骨堂を建立」したとあります。しかし、この地にキリスト教会が設立されることになり遺骨の撤去を命じられたことから、万松院が「市当局より500円の補助を受けるとともに、区長達の援助の下に寄附金を集め、およそ2万4000円と当蔵町学童30名の奉仕により」、1951年（昭和26年）7月中旬に万松院境内に「天衣無縫之塔」を建立したとのことです。

遺骨は1973年（昭和48年）ごろに那覇市識名の「戦没者慰霊之塔」へ移され（「戦没者中央納骨所」を指すと思われる）、<sup>5</sup> 現在、この慰霊塔はありません。いつまで存在したのかなど詳細は不明です。

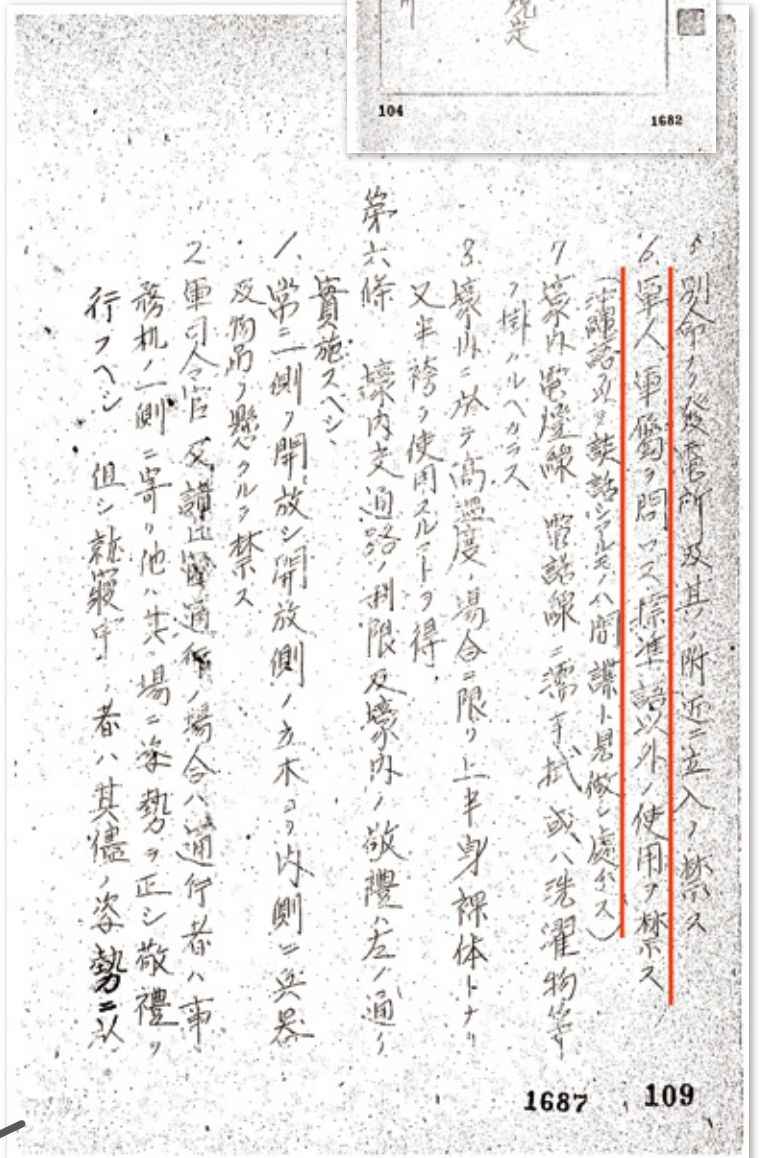
## 2.7 日本軍関連の一次資料

「第32軍戦闘指針第一号」は1945年（昭和20年）2月15日に日本軍第32軍が発令した沖縄戦における指示文書で、航空機は艦船1隻、特攻艇は船1隻、歩兵は10人殺害、戦車1台を撃破目標とする撃敵合言葉（標語）が記されていました。

「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」は、第32軍参謀長の長勇が作成した文書で、司令部壕内の各部隊の内部管理について定められています。



▲第32軍戦闘指針第1号 [1945年（昭和20年）2月15日]  
／出典：防衛研究所



▲第32軍参謀長長勇作成「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」  
[1945年（昭和20年）5月5日] より／出典：防衛研究所

「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」の中には、「軍人軍属を問わず標準語以外の使用を禁ず（沖縄語を以て談話しあるものは間諜と見做し処分す）」という内容も記されています。標準語ではない言葉、とりわけ沖縄語を使用した者は間諜、つまりスパイとみなすという意味です。このような命令は、多くの沖縄住民が日本軍によってスパイとみなされ、虐殺されるという悲劇的な結果を招きました。

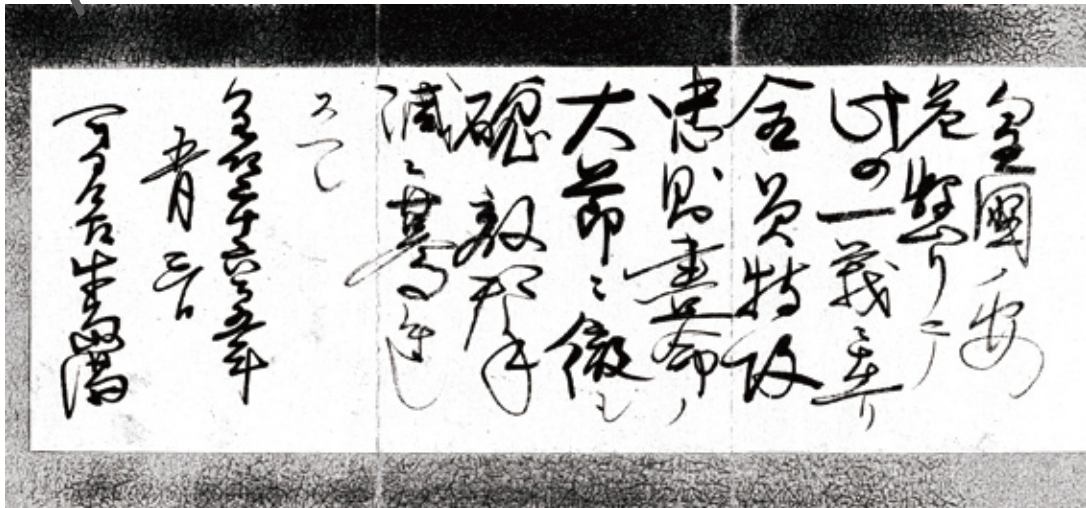
## 2. 沖縄戦と第32軍

1945年(昭和20年)5月3日、翌日の総攻撃に際して、  
第32軍司令官の牛島満中将が発した訓示です。

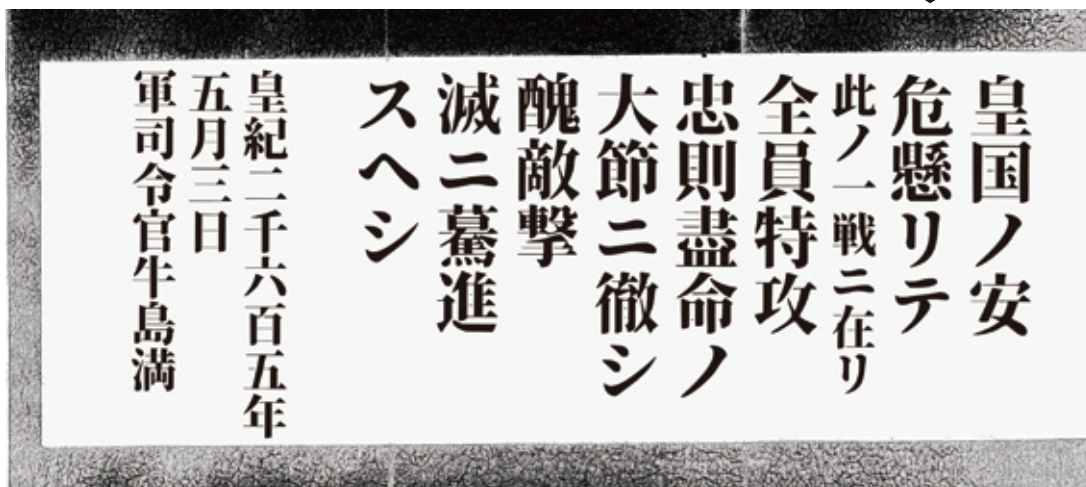
「皇国ノ安危懸リテ此ノ一戦ニ在リ」は、  
「この戦い(沖縄戦)は日本の存亡が関わるほどの重要な戦いである」と示しています。  
「全員特攻忠則盡命ノ大節ニ徹シ醜敵撃滅ニ驀進スヘシ」は、  
「国(天皇)への忠義のために全員が生きて帰らない覚悟で戦い、  
醜い敵へ回復不能な損害を与え続けよ」と鼓舞する内容です。



▲牛島満/牛島貞満氏提供



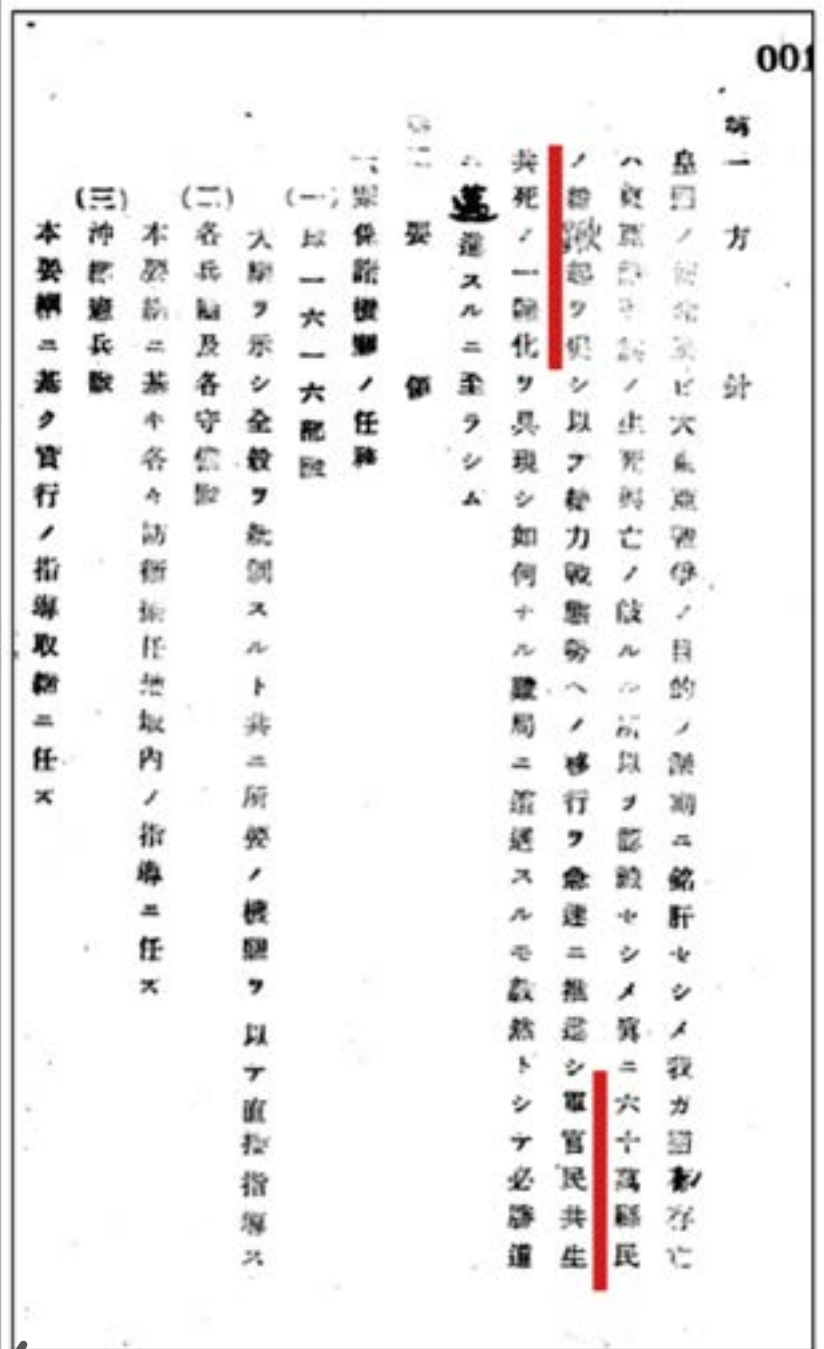
▲第32軍司令官牛島満中将訓示 [1945年(昭和20年)5月3日]/出典:防衛研究所



▲第32軍司令官牛島満中将訓示を文字起こしたもの

「皇紀」とは、初代天皇の神武天皇が即位したとされる年を元年とする日本独特の年の数え方。  
1940年は皇紀2600年に当たるとして、国を挙げて全国各地で祝賀行事が行われた。

『秘密戦二関スル書類』に綴られている、第32軍「報道宣伝防諜等に関する県民指導要綱」（1944年11月18日）。防諜対策の極秘文書で、国頭国土隊が保管していました。沖縄戦で米軍に押収されましたが戦後日本に返還されました。現在は国立公文書館に所蔵されています。



▲秘密戦二関スル書類／出典：国立公文書館

「真に60万県民の総決起を促し、もって総力戦態勢への移行を急速に推進し**軍官民共生共死の一体化**を具現しいかなる難局に遭遇するも毅然として必勝道に邁進するに至らしむ」

「県民をして積極的に軍に協力すると共に絶対に軍に信頼し、いかなる事態に遭遇するも動揺混乱することなく…」

「個人生活は国家と共に存することを知らしめ総てを戦争完遂の一途に集中し、もって敵愾心を旺盛ならしめ奉公心を昂揚せしむ」  
（『沖縄県史資料編23 沖縄戦日本軍史料沖縄戦6』2012年p696）

### 2.8 第32軍司令部関連年表

#### 1944年（昭和19年）

- 3月22日 大本営、第32軍を編成
- 3月25日 第32軍司令部、福岡で編成を開始
- 4月2日 第32軍司令部を真和志村松川の蚕糸試験場に置くことを決定
- 8月10日 牛島満司令官着任
- 9月 南風原村津嘉山で、戦闘司令所の構築を開始 読谷山村石嶺久得で、軍予備戦闘司令所の構築を開始
- 10月10日 十・十空襲（米軍機による南西諸島空襲）
- 12月3日 司令部を首里に置くことを決定 翌年1月中旬までに移転できるように準備を命じる
- 12月9日 首里城地下で第32軍司令部壕の構築を開始

#### 1945年（昭和20年）

- 1月21日 司令部を首里の沖縄師範学校内に移転
- 2月15日 「第32軍戦闘指針」を発表 「一機一艦船、一艇一船、一人十殺一戦車」の特攻作戦の発令
- 3月23日 米軍、南西諸島全域を空襲 第32軍司令部、首里城地下の第32軍司令部壕に入る
- 3月26日 米軍、阿嘉島・座間味島・慶留間島に上陸
- 4月1日 米軍、沖縄島中部西海岸に上陸
- 5月4日 日本軍、総攻撃に出るが苦戦 翌日、攻撃を中止
- 5月5日 第32軍、「天ノ巖戸戦闘司令部取締二関スル規定」を定める
- 5月22日 「新作戦計画」を策定し、喜屋武半島に撤退することを決定
- 5月27日 第32軍司令部壕を放棄、津嘉山に移動
- 5月30日 第32軍司令部、津嘉山から摩文仁に撤退
- 5月31日 米軍、首里を占領
- 6月19日 第32軍牛島司令官、「爾今各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し 最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」の命令を下達
- 6月23日 第32軍牛島司令官、長参謀長自決（6月22日の説もある） 第32軍の組織的戦闘の終了
- 9月7日 米軍第10軍司令部（越来村森根）で降伏調印式

※戦闘としての沖縄戦はほぼ終わったが、投降せずに翌年まで山中に潜伏し続けた部隊もいた。島々や本島の民間人収容地区では飢えとマラリアによる被害は続いていた。また多くの住民が郷里に帰ることができないままだった。

# 3 第32軍司令部壕

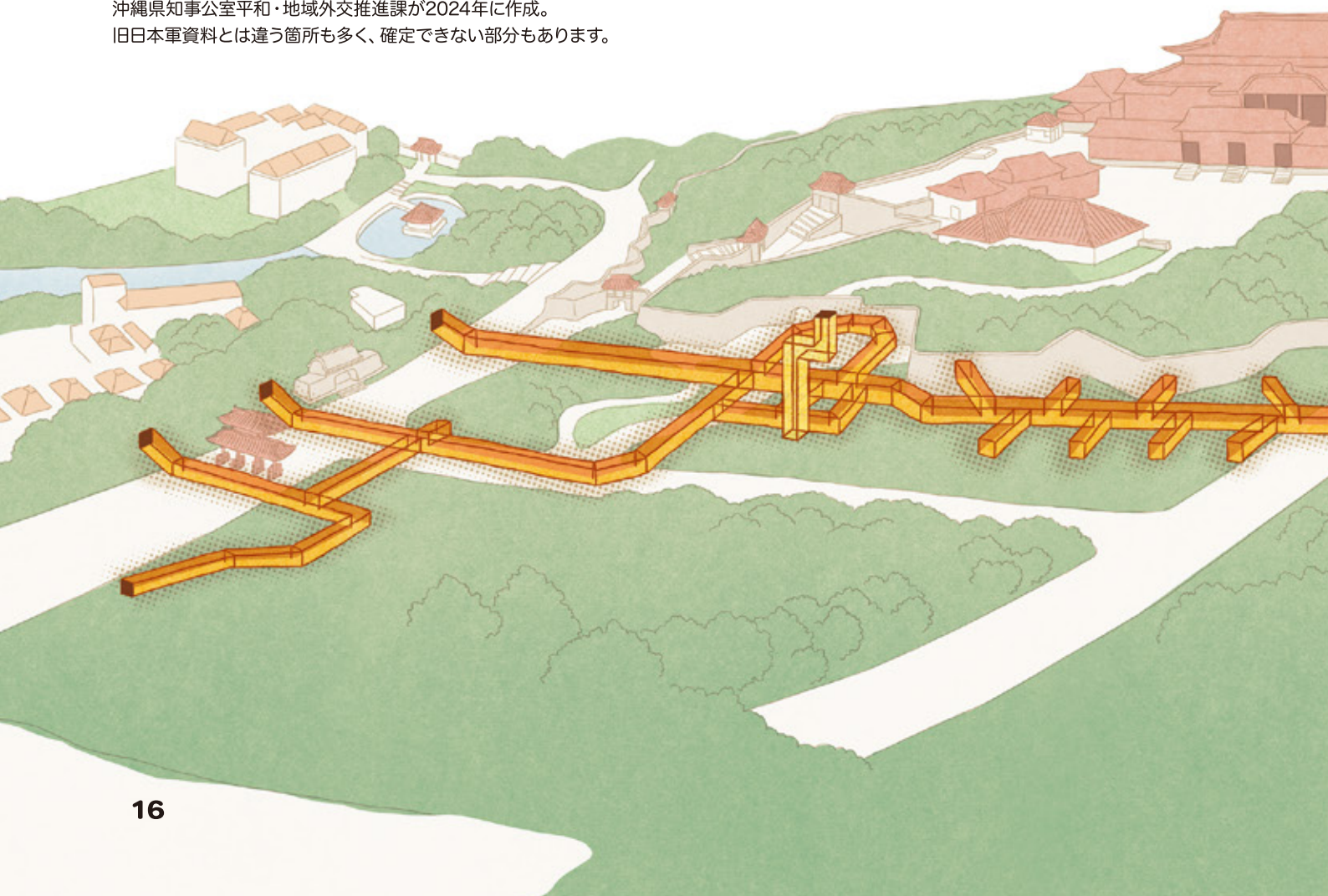
## 3.1 第32軍司令部壕の構造

第32軍司令部壕は、沖縄県内の地下壕の中でも屈指の規模を有しています。首里城が立つ丘の地下約10～30mを南北に貫通し、直線距離にして約375m、壕の総延長は約1,000mと推定されています。しかし、壕の一部が埋没しているため、詳細については解明されていない部分が多くあります。主となる坑道とそこから複数の坑道が枝分かれし、北側に3か所、南側に2か所の坑口があります。また、将校室をはじめ参謀室、軍医部、救急所、通信部、作戦室、電信部など多くの部屋が配置されていました。壕内の天井や壁面は岩盤を粗く削って掘り込んでおり、壁面にはツルハシなどによる無数の掘削のあとが確認できます。また、床面の一部には現在も、枕木が敷かれているのを確認できます。天井部分には地上へつながる立坑も数か所あったとされ、おもに連絡道や通気孔として機能していました。

現在は、壕内の崩落防止と保全のために1994～1995年度に設置した鋼製の支保工（補強用の仮設構造物）が残っています。

### ▶第32軍司令部壕の地下イメージ

本図は、米軍が沖縄戦直後に調査をおこなってまとめたIntelligence Monographに基づいて沖縄県知事公室平和・地域外交推進課が2024年に作成。  
旧日本軍資料とは違う箇所も多く、確定できない部分もあります。



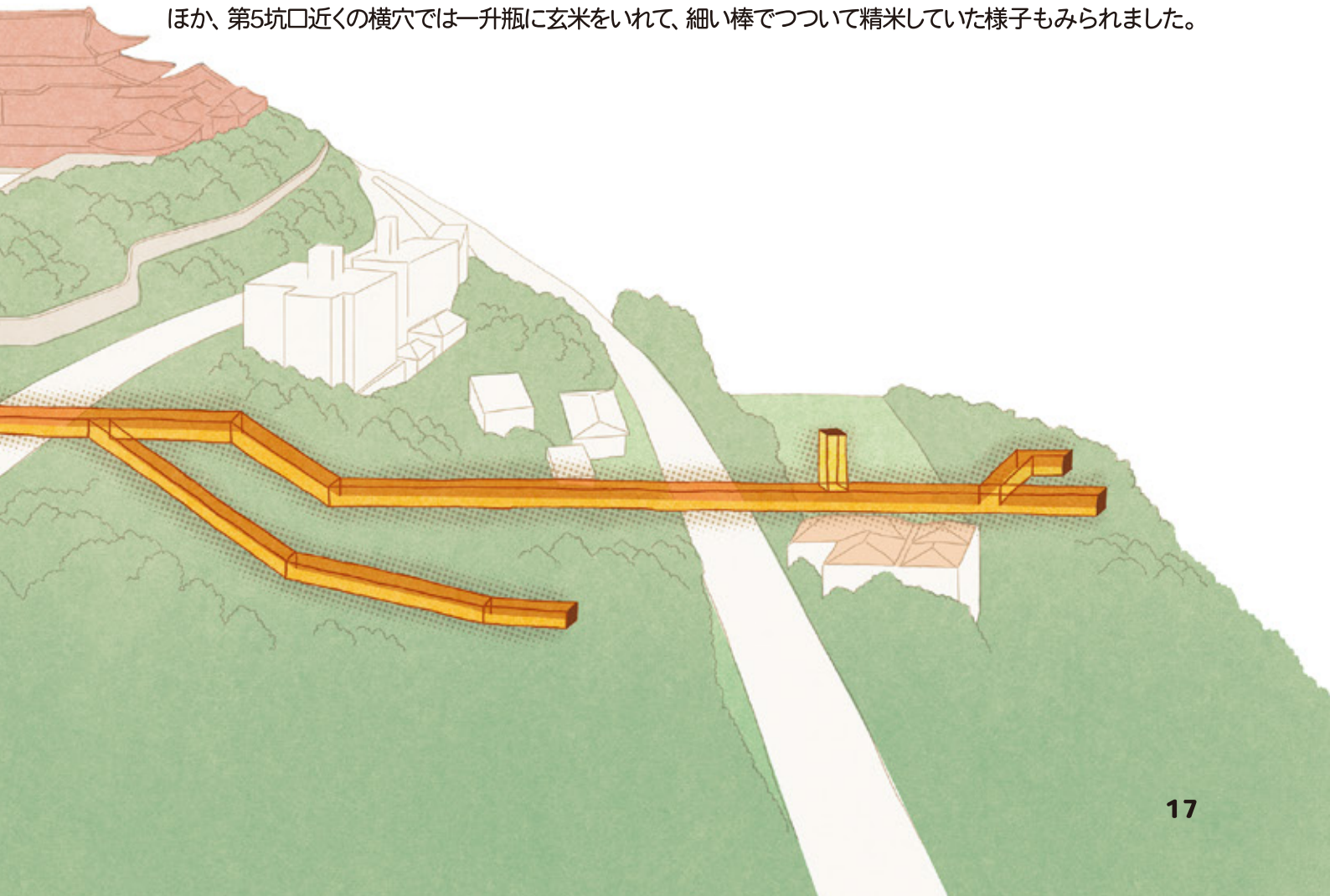
## 3.2 第32軍司令部壕から見つかった遺物

第5坑道からは、大きく分類して5種類の遺物が発見されています。



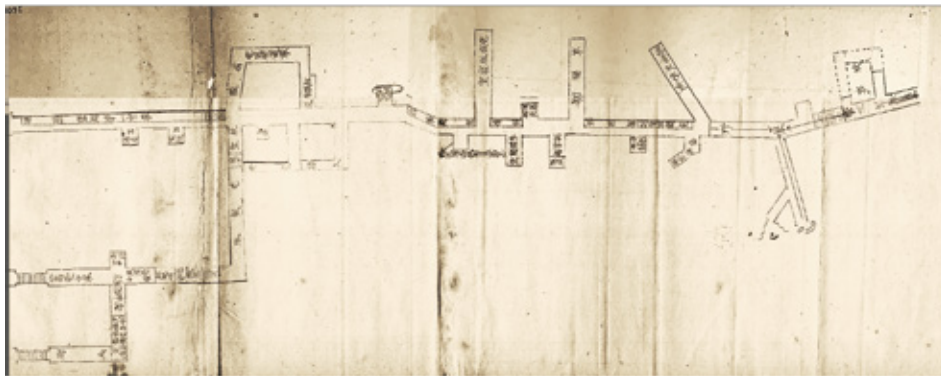
- ① 通信装置  
(通信機、受話器、  
バッテリーなど)
- ② 壕掘り作業道具  
(ツルハシなど)
- ③ 日用品  
(一升瓶、お椀など)
- ④ 医療品  
(薬品瓶など)
- ⑤ 武器  
(小銃、火炎放射器など)

第32軍司令部壕では、他の陣地壕跡では見られない通信機器類が確認できることから、情報を取り扱う施設としての戦略的・戦術的に重要な役割があったと推測できます。また、簡易的な救急所があったほか、第5坑口近くの横穴では一升瓶に玄米をいれて、細い棒でつついて精米していた様子もみられました。



### 3.3 日本軍作成の壕内図

第32軍が作成した司令部壕に関する見取り図は5枚が残っています。1945年4月9日から5月5日までの日付です。

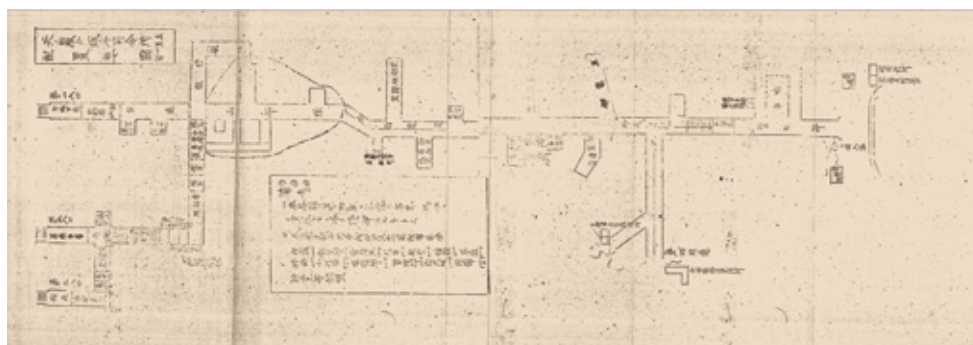
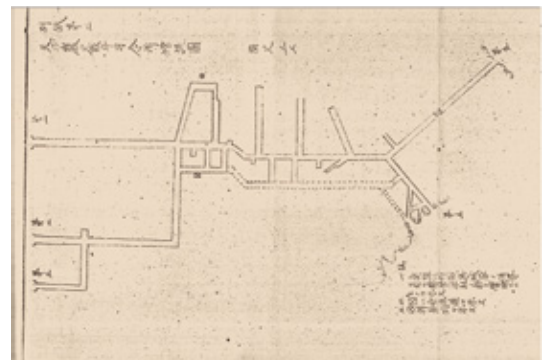


◀①【1945年4月9日付】  
「球日命第87号」／出典：防衛研究所

軍首脳部の部屋は第1坑道側にありました。第2、第3坑道は衛兵や警備中隊がいました。炊事場は2カ所から掘り出し始めたところです。

②【1945年4月29日付】  
「球日命第99号」／出典：防衛研究所▶

県首脳部が入るための増設予定坑道を点線で示した増設計画図です。その構築作業は軍の指導を受けて県警察部が担うと記されています。山部隊（第24師団）が入壕するため、壕内の配置換えがありました。部署名は記されていません。

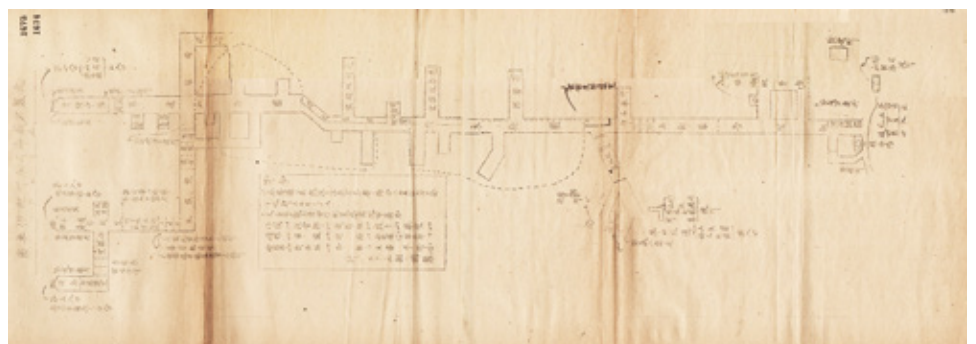


◀③【1945年5月1日付】  
「日々命令録 昭和20年3月29日以降  
球第1616部隊参謀部随空(2)」  
／出典：防衛研究所

第1坑道側にあった軍司令官室や参謀室が暑さのため、第3坑口近くに移動しました。5月4日の総攻撃に備えて、第24師団や独立混成第44旅団（鈴木兵团）の両司令部が入壕したことに伴い、各部署の配置が変更されています。遅れて入壕した第44旅団の位置はまだ記入されていません。

④【1945年5月2日付】  
「球日命第102号」／出典：防衛研究所▶

第24師団と独立混成第44旅団の壕内での住み分けや部隊ごとの出入口が指定され、壕内の大方の機能配備が固まりました。炊事場の掘削が進み、壕内の便所の数も増えています。

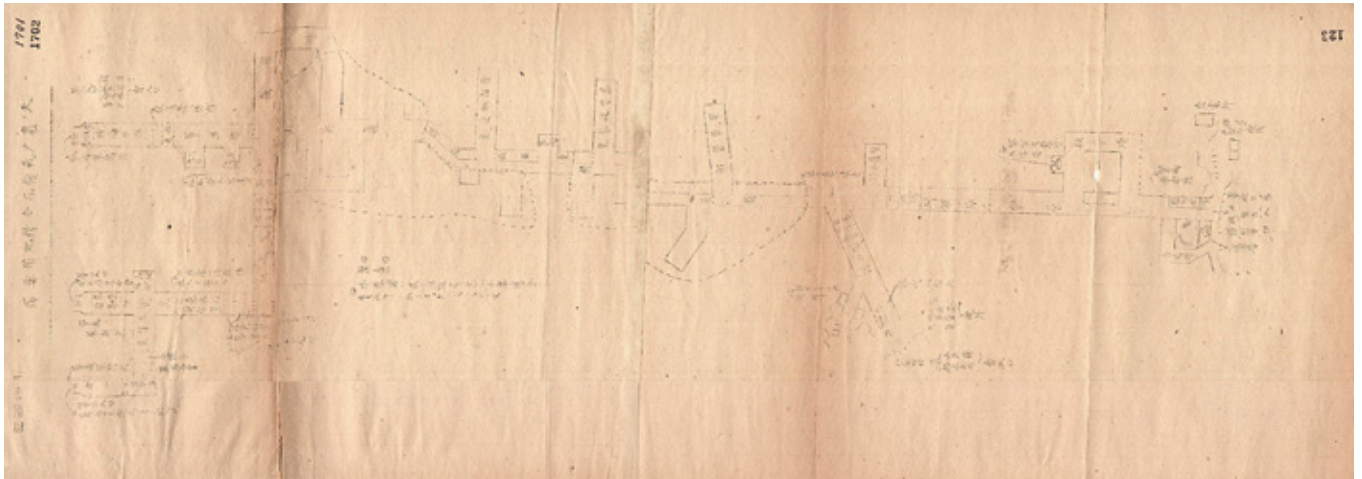


### 3.第32軍司令部壕

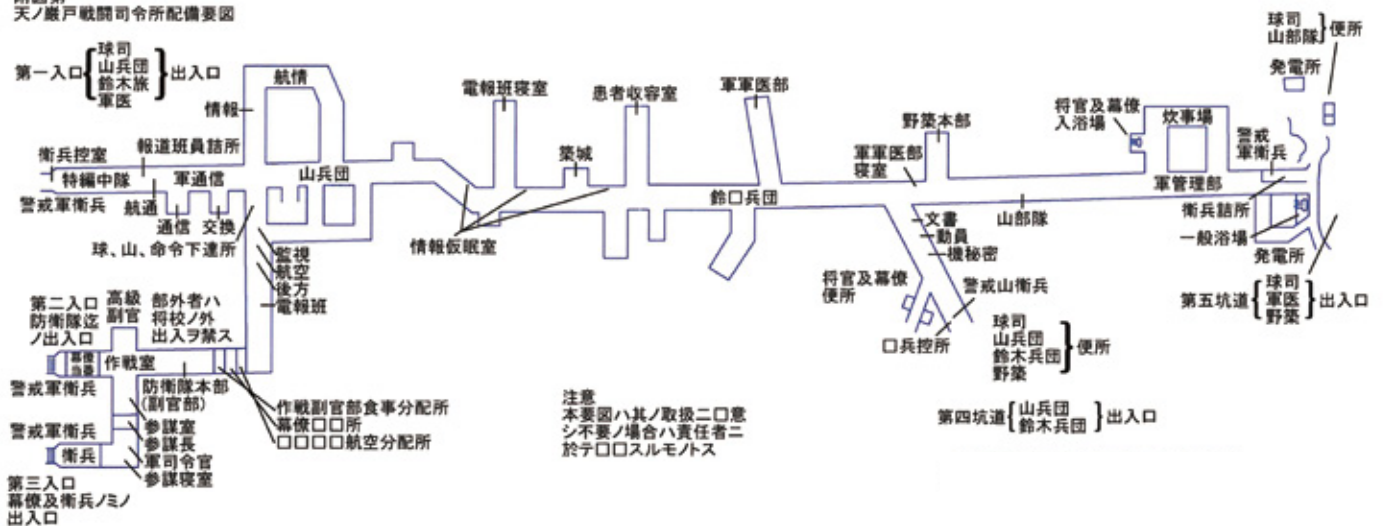
▼⑥【1945年5月5日付】

「天ノ巖戸闘司令部取締に関する規定」／出典：防衛研究所

現存する第32軍作図の中で最も新しい見取り図です。  
炊事場の掘削がほぼ完成しています。



附図第一  
天ノ巖戸闘司令部配備要図



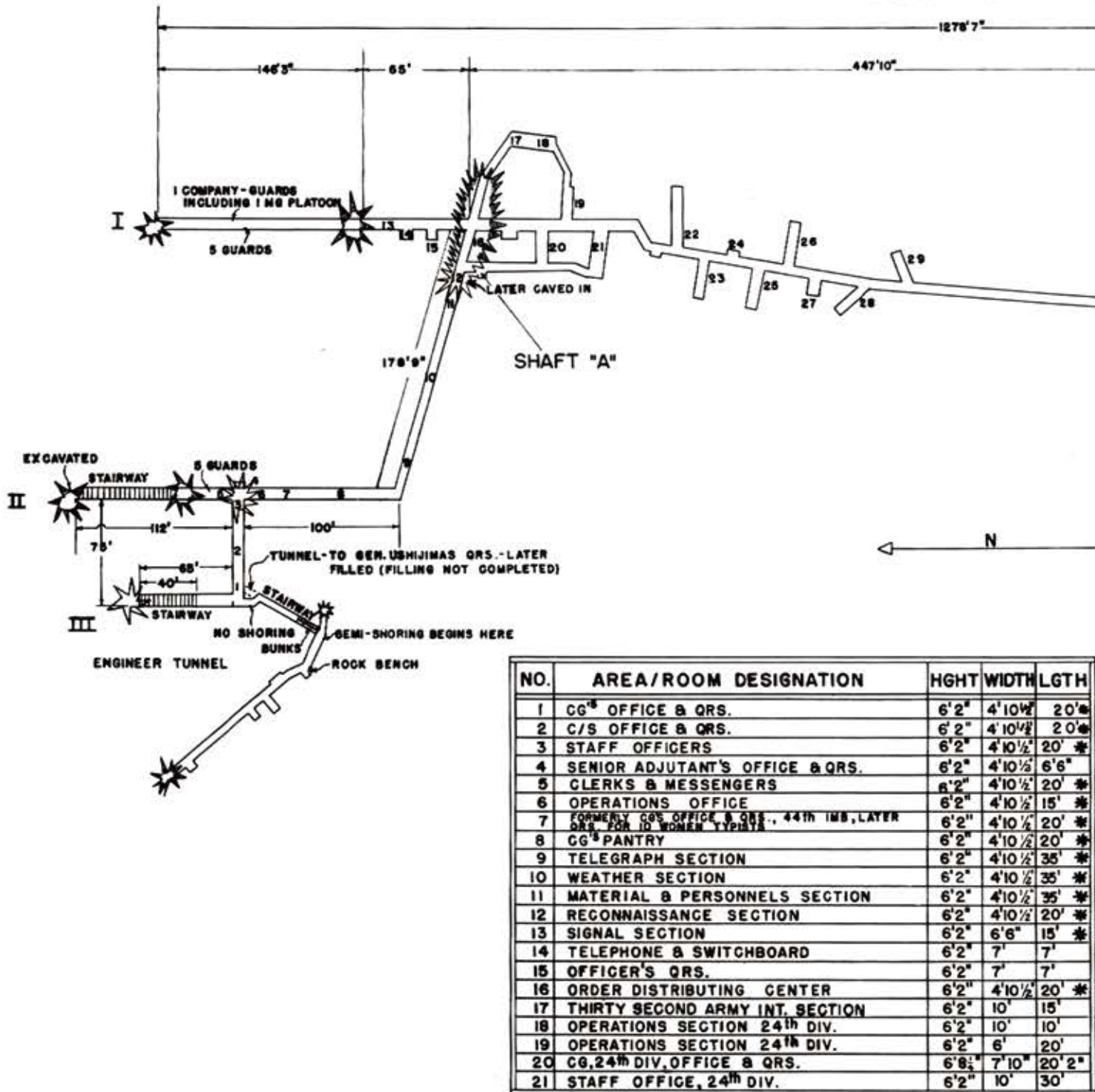
「沖縄県子ども生活福祉部 令和3年度 第32軍司令部壕保存・公開検討委員会における会議支援・技術助言業務委託 第4会合資料」より作成

参考：津多則光「第32軍司令部壕（首里）解説」

### 3.4 米軍作成の壕内図 (インテリジェンス・モノグラフ)

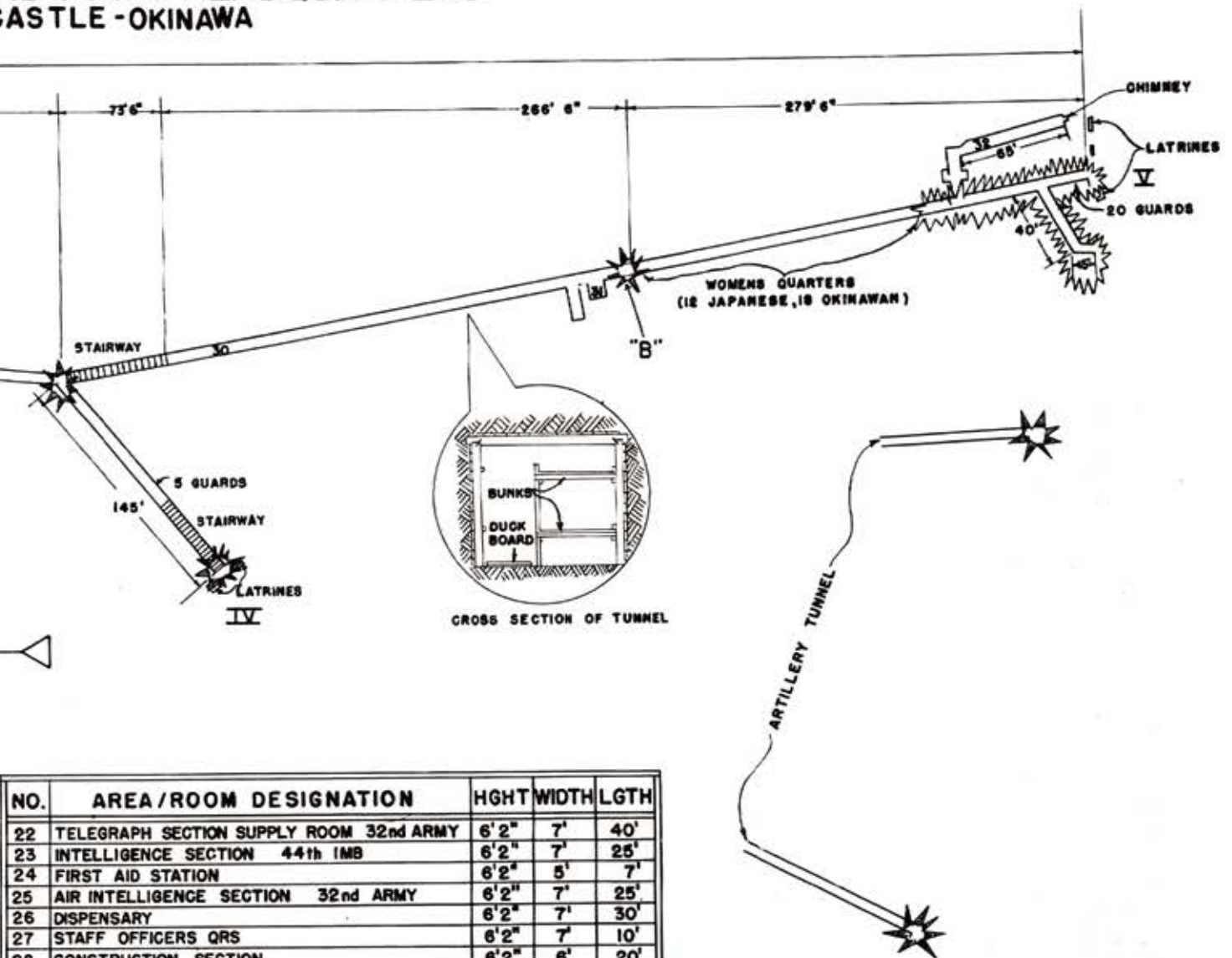
FIGURE  
FLOOR

JAPANESE THIRTY SECOND  
BELOW SHURI O



### 3.第32軍司令部壕

## PLAN AND ARMY HEADQUARTERS CASTLE - OKINAWA

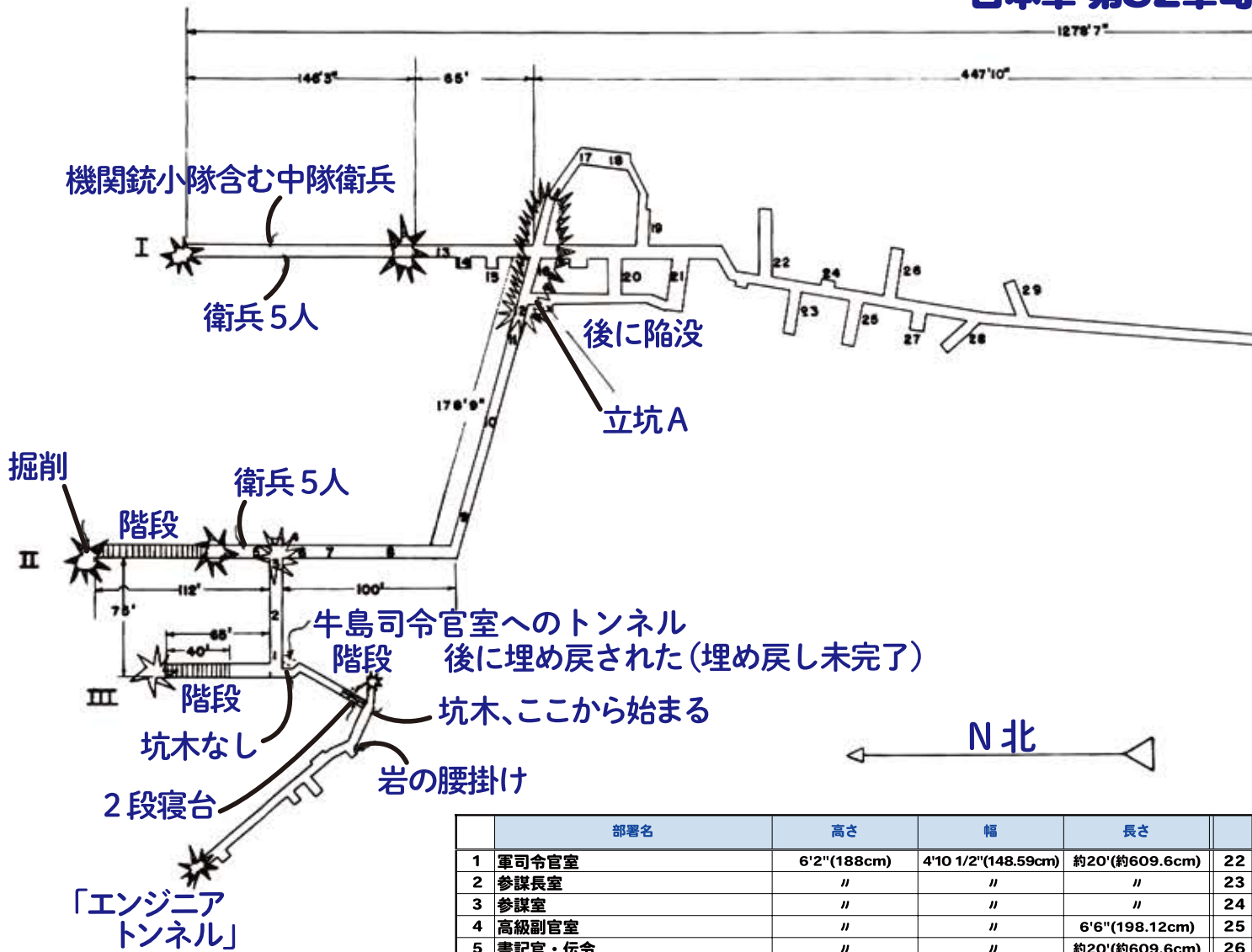


NO.	AREA / ROOM DESIGNATION	HGHT	WIDTH	LGTH
22	TELEGRAPH SECTION SUPPLY ROOM 32nd ARMY	6' 2"	7'	40'
23	INTELLIGENCE SECTION 44th IMB	6' 2"	7'	25'
24	FIRST AID STATION	6' 2"	5'	7'
25	AIR INTELLIGENCE SECTION 32nd ARMY	6' 2"	7'	25'
26	DISPENSARY	6' 2"	7'	30'
27	STAFF OFFICERS QRS	6' 2"	7'	10'
28	CONSTRUCTION SECTION	6' 2"	6'	20'
29	MEDICAL OFFICERS OFFICE	6' 2"	7'	20'
30	STAFF OFFICE 44th IMB	6' 2"	6'-5"	15' *
31	CO OKINAWA NAVAL BASE FORCE OFFICERS QRS. (REAR ADMIRAL OYAI FROM 10-17 MAY 45)	6' 2"	7'	10'
32	KITCHEN	6' 2"	6'	65'
A B	SECONDARY ENTRANCES & VENTILATION SHAFTS (SEE DRAWINGS -- )			
	SECONDARY TUNNELS	6' 2"	4'-10 1/2"	
I-X	ENTRANCES			
	MAIN TUNNELS	6' 2"	6' 6"	
★	BLOWN AREAS -- NOT PASSABLE			
★	BLOWN AREAS -- PASSABLE			
*	APPROXIMATELY			

◀ 米軍による沖縄戦の報告書「インテリジェンス・モノグラフ」掲載の壕内配置図。インテリジェンス・モノグラフとは、米第10軍参謀第2部(G-2)が作成した沖縄戦の調査報告書。パート1~5まであり、首里城下の第32軍司令部壕についてはパート2のセクションDで取り上げられている。作成日は一定ではなく、本報告は1945年(昭和20年)8月に作成されたと思われる。米軍は沖縄進攻作戦において、日本兵捕虜への尋問や戦場で入手した文書、航空機からの地上偵察及び空中写真などから、日本軍の戦術、戦闘計画と命令、陣地や兵器などについてまとめ、後の日本本土への攻撃にそなえていた。

### 3.5 米軍作成の壕内図 (インテリジェンス・モノグラフ) 日本語訳

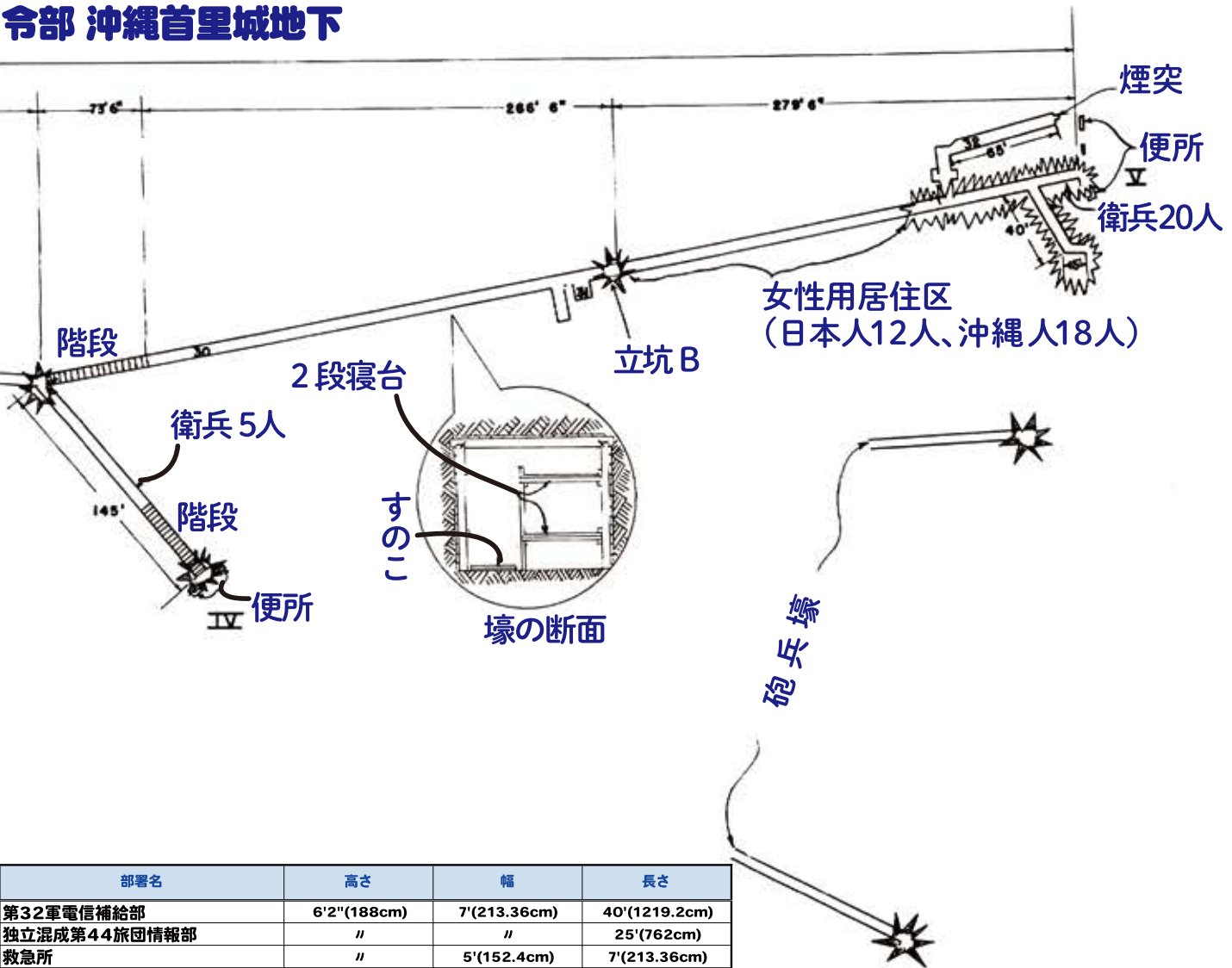
図版  
日本軍 第32軍司



	部署名	高さ	幅	長さ	
1	軍司令官室	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	22
2	参謀長室	"	"	"	23
3	参謀室	"	"	"	24
4	高級副官室	"	"	6'6"(198.12cm)	25
5	書記官・伝令	"	"	約20'(約609.6cm)	26
6	作戦室	"	"	約15'(約457.2cm)	27
7	元は独立混成44旅団司令官室 後に女性タイピスト10人の居室	"	"	約20'(約609.6cm)	28 29
8	食料貯蔵庫	"	"	"	30
9	電信部	"	"	約35'(約1066.8cm)	31
10	気象部	"	"	"	
11	物資・兵員部	"	"	"	32
12	搜索部	"	"	約20'(約609.6cm)	
13	通信部	"	6'6"(198.12cm)	約15'(約457.2cm)	A B
14	電話交換器	"	7'(213.36cm)	7'(213.36cm)	
15	将校室	"	"	"	I-V
16	命令下達所	"	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	
17	第32軍情報部	"	10'(304.80cm)	15'(457.2cm)	★
18	第24師団作戦部	"	"	10'(304.80cm)	
19	第24師団作戦部	"	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)	★
20	第24師団師団長	6'8 1/4" (203.8cm)	7'10"(238.76cm)	20'2"(614.68cm)	
21	第24師団将校	"	10'(304.80cm)	30'(914.4cm)	★

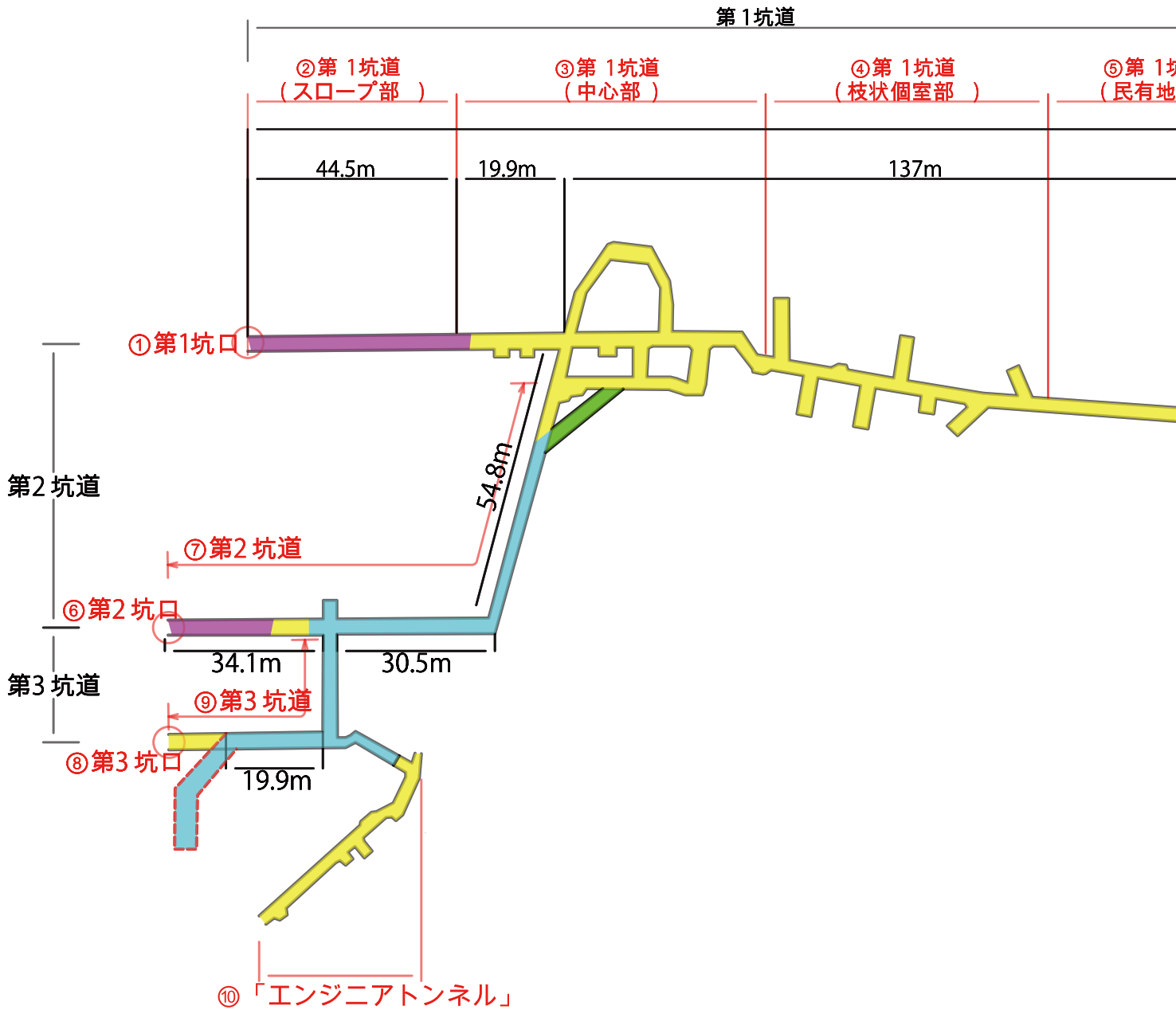
### 3.第32軍司令部壕

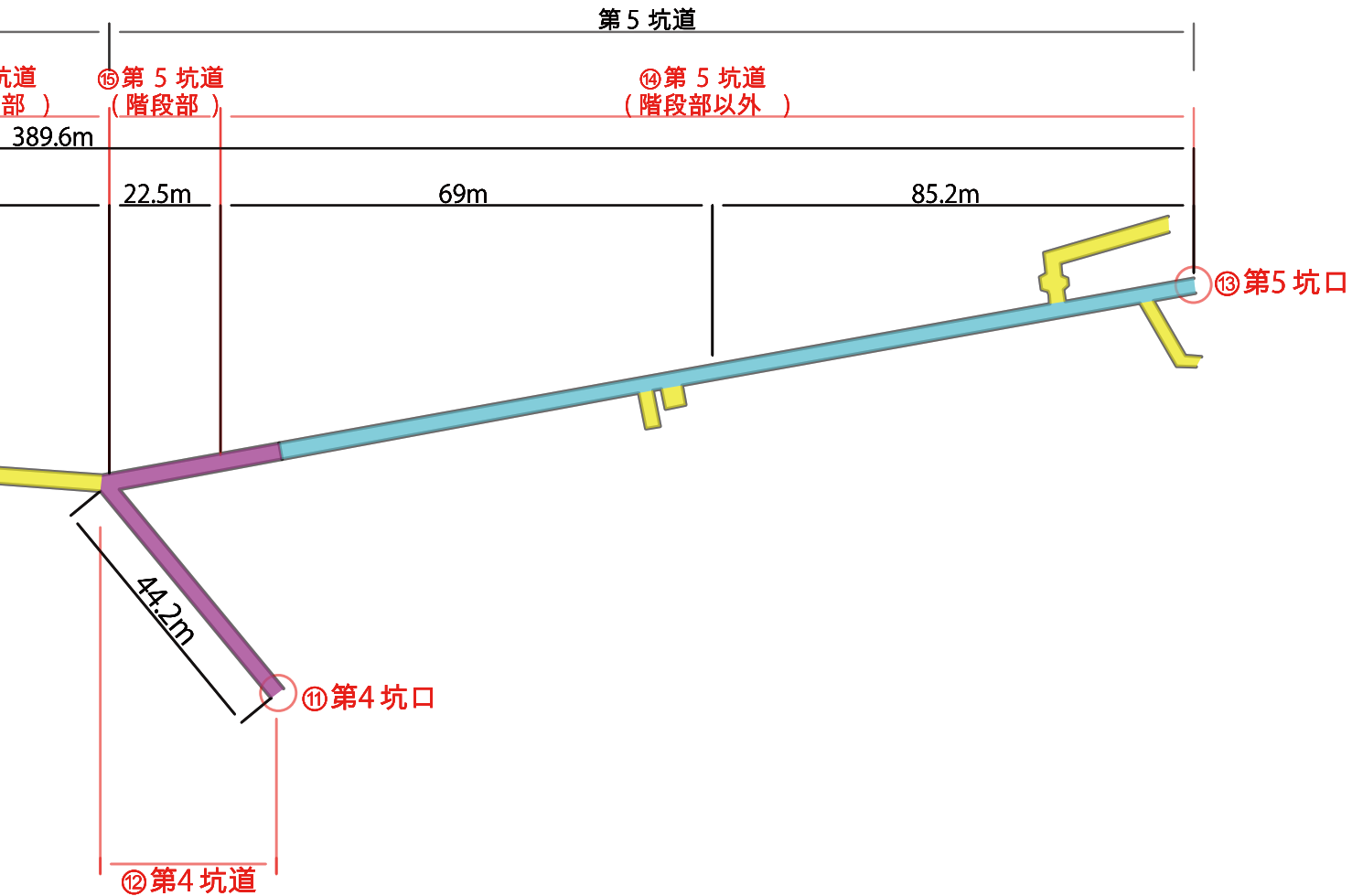
## 7 平面図 司令部 沖縄首里城地下



部署名	高さ	幅	長さ
第32軍電信補給部	6'2"(188cm)	7'(213.36cm)	40'(1219.2cm)
独立混成第44旅団情報部	〃	〃	25'(762cm)
救急所	〃	5'(152.4cm)	7'(213.36cm)
第32軍航空情報部	〃	〃	25'(762cm)
軍医部	〃	〃	30'(914.4cm)
将校室	〃	〃	10'(304.80cm)
陣地構築部	〃	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)
軍医室	〃	〃	〃
独立混成第44旅団参謀室	〃	6'5"(195.58cm)	約15'(約457.2cm)
海軍陸戦隊司令官 (大田少将) 1945年5月10-17日	〃	〃	10'(304.80cm)
炊事場	〃	6'(182.88cm)	65'(1981.2cm)
2次入口と換気口			
2次トンネル	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	
入口			
主トンネル	6'2"(188cm)	6'6"(198.12cm)	
爆破地点 (通行不可)			
爆破地点 (通行可能)			
およその数字			

### 3.6 沖縄県の調査による現況の壕内図





#### 凡例

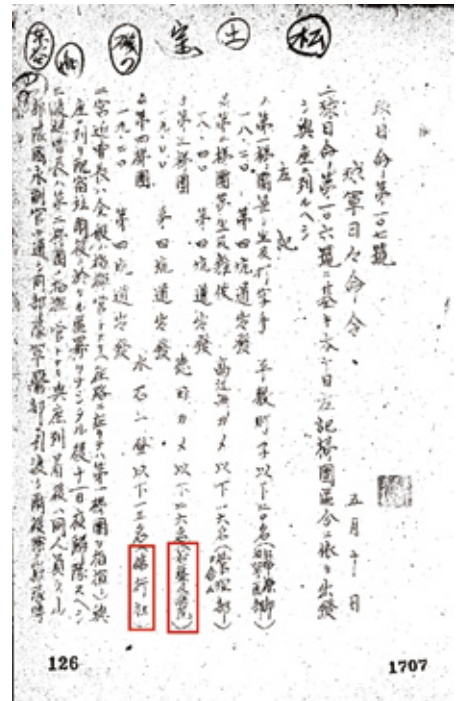
- **立ち入り可能区間**  
平成5・6年度の沖縄県試掘調査で立ち入り可能となった区間。
- **迂回坑道(崩落区間)**  
平成5・6年度の沖縄県試掘調査で迂回坑道を掘削し立ち入り可能となったが、崩落による閉塞で立ち入りができなくなった区間。
- **立ち入り不可区間**  
米軍により調査済みだが崩落による坑道閉塞が推測される区間。
- **実態不明区間**  
米軍による調査も実施されておらず、試掘調査も実施困難であり実態が不明な区間。

令和4・5年度詳細調査により、第1坑道スロープ部(実態不明区間)及び第1坑道中央部(立ち入り不可区間)でボーリング調査等を実施した結果、坑道位置を特定できたが、内部は崩落し、閉塞していることを確認した。壕内図は、1945年米軍作成の『インテリジェンス・モノグラフ』に収録された図を参照している。

## 3.7 第32軍司令部壕に関する証言

第32軍司令部壕に関する当時の証言は限られており、特に壕の中心部分における状況についてはほとんど証言が得られていません。壕内には1,000名以上がいたとされ、多くの人が狭い壕内を行き交い、現地召集兵は膝を立てて睡眠を取っていたとされています。また、その中には女子雇用人もおり、第32軍司令部の陣中日誌では、司令部が南部撤退を正式決定する以前に、女性たち75人を与座（現糸満市）へ移動させる命令が記録されています。女性たちは「筆生」（書記）や「打字手」（タイピスト）「若藤及び病院」や「偕行社」に所属していたことが確認できます<sup>6</sup>。

壕の内部は蒸し暑く、悪臭が充満していたとの証言もあります。天井から多量の地下水が染み出していたため、坑道の脇に排水用の溝が掘られ、水を外へ出すような工夫が施されていました。それでも湧き水と泥に悩まされ、十字鍬やシャベルで壕外へそれらを掻き出していました。これらのことから、壕内の環境は決して良くなかったことがうかがえます。また、第5坑口近くに2基の発電機が設置され、近くの井戸水を冷却水として使用していたことから、壕内には電気が安定供給されていたようです。加えて発電機の近くには炊事場があり、食糧が山積みになっていたとのことです。



▲球日命第107号 [1945年5月10日]  
／出典：防衛研究所

### 山内昌健さんの証言

「惣慶の負傷は決して樂觀は許されなかった。食事をとることができず、3日間も熱が下がらず、果ては精神錯乱を起こし、狂人のように喚き散らす始末。このままでは生命にもかかわる大事であった。その日の夕刻、軍司令部壕第1坑道入口が敵艦砲炸裂により崩壊したため、その修復作業に我々がかり出されることになった。その時ついでに、軍司令部壕内の外科病棟に惣慶を移送することに話がまとまった。私たちは砲弾飛来の合間を縫って、惣慶を戸板に乗せて、降りしきる雨の中を師範学校記念運動場を横切って、運動場南面直下に掘られた壕の入口へ入って行った。惣慶清和は昭和20年5月27日、こめかみの傷が元で軍司令部外科病棟で戦死した。」

（出典：龍潭同窓会（1980年）『龍潭百年沖縄師範学校百年記念誌』p569-570）

### 城間期一さんの証言

「難工事のすえ坑道は貫通したが、われわれは軍司令部壕にはいることを許されなかった。離れたところから奥の方をのぞいてみると、こうこうと電灯がついているところがあった。その一帯は軍司令部首脳の居室で「あそこが牛島中将の部屋だ」という者がいた。いかにも将官室にふさわしく、広々として立派な造りだった。」

（出典：兼城一（2000年）「沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦（上）」p127）

### 大田昌秀さんの証言

「壕の内部は至る所、頑強な松板で壁がはられ、丸太のままの支柱が一間おさくらの間隔で立ち、洞窟戦闘指揮所としてはまさに鉄壁のものだった。第2、第3坑道は、それぞれ首里第二国民学校の運動場に入口があり、枝坑道によって、首里城の裏手の金城町に抜けている第四、第五坑道と連なっていた。参謀室付近の支柱の丸太には、『醜敵撃滅』

『必勝不敗』『撃ちてしまん』等のはり紙が毎日のように目についた。長参謀長の直筆とのことだった。」

(出典:大田昌秀,外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p9)

### 渡久山朝章さんの証言

「野戦築城隊の球10158部隊第2野戦築城隊に配属された一中隊から三中隊までの隊は、軍司令部洞窟陣地構築に当たった。米軍の上陸という事態に至っても、この陣地は未完成だったのである。外では砲爆撃の脅威と危険にさらされながらトロッコを押し、内では湧水と泥濘に悩まされ、落盤事故にあいながら、昼夜一途にショベルを握り十字鋤を振った。こうした中では、14、5歳の年少者といっても容赦はなく、召集兵たちと同様のノルマを課された。さらに、軍上層部の焦りは、そのまま築城隊への八つ当たりともなっていた。」

(出典:龍潭同窓会(1980年)『龍潭百年—沖縄師範学校百年記念誌』p579)

### 儀間昭男さんの証言

「5月27日、摩文仁へ撤退するその日まで軍司令部の壕は掘り続けられた。壕掘りも命がけだった。落盤事故があったり、掘り出した土石を外に運び出す作業など、砲爆下間髪を容れずトロッコを押ししていくのだから容易なことではなかった。」

(出典:沖縄師範学校龍潭同窓会(1986年)『傷魂を刻むわが戦争体験記』p144)

### 大田昌秀さんの証言

「壕を一步出たら寸時も保証できぬ生命だったが、私達は外へ出ていく任務をむしろ喜んだ。刻々と情勢が悪化するにつれて、用便も壕内でするようになり、壕内の生活は堪えられるものではなかった。しらみが服いっぱいいたかった。多くの人が狭い壕にうごめき、炭酸ガスと熱気が混じってむれかえり、その上鼻つく悪臭は避けようもなく、皆は争って壕口へつめかけた。狭い壕では身を横にすることもできず、膝を立てて眠るのがやっとだった。澄んだ空気が吸いたい。皆の欲望はこれにつきたといってもよかった。その点、任務を帯びて壕外を自由に飛び回れた千早隊員は幸せだった。」

(出典:大田昌秀,外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p14-15)

### 安里繁さんの証言

「軍司令部に毎日通っているうちに、野戦築城隊(駒場部隊)本部の将兵とも顔馴染みになった。特に某曹長とは親しかった。(中略)軍司令部に行くと、その曹長の寝台によく休ませてもらった。そして、カンメンポーや缶詰をもらったり、時には、砂糖入りの酒を水筒から飲ませてくれたりもした。」

(出典:大田昌秀,外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p210)